

天国の法廷

第3編 12章

誰でも神の法廷を見上げるなら、まことの義は神の与えて
くださる恵みにしかないことを悟るようにされる



他の人と比較するときは自分の義のために優越感に浸ることができそうですが、神の義を考えた瞬間、私たちはすぐにそのような確信を失ってしまうでしょう。私たちが人びとの前で私たちの義を誇るとき、神は天で私たちの義を憎まれるのです (ルカ 16:15)。人の行為は決して神の義を満足させることはできません (コリント一 4:4)。

裁判所の法廷は訴訟事件の審理や裁判を通じて正義を明らかにするところです。しかしどんな国の法廷であってもそこは完全なところではありません。ときには無罪の人を有罪にすることもあり、罪を犯した人を見逃してしまっただけで無罪にしてしまうこともあるのです。ですから民事でも、刑事の裁判でも上級裁判所で再び審理を受ける権利が認められ、可能な限り裁判が公正に進められるような制度が作られています。しかし、それでもやはり裁判所は誤りを犯す可能性があります。

ときには証人たちのでたらめな証言と、弁護士の実力などによって判決が正反対に変わってしまうこともあります。人はその判決に従って笑いもし、泣きもすることになります。訴訟で勝てば義人となり、負ければ罪人になってしまうからです。普通の人びとは自分が法廷に立つことなどありえないと考えています。なぜなら自分は罪とは全く関係ないと思っているからです。また、自分が法廷で無罪とはなりえない罪人であるとは考えていません。しかし、本当にそうでしょうか。誰でも必ず立たなければならぬ法廷があると言うことをあなたは知っているでしょうか (ヘブライ 9:27)。人間は誰でも必ず神の法廷に立つときがやってきます。

第1節 天国の法廷に立たなくてもいいような義しい者は誰もいない。

神の前で自分を罪人であると認めることができないで、神の前で自分の義をある程度は誇る事ができると考える人がいます。恐れ知らずにも、彼らがそのような考えるようになる最も大きな理由は、彼らが地上の法廷と神の法廷を混同しているためです。彼らは完全無欠な天国の法廷を、罪人の罪を見逃すような過ちを繰り返して犯す可能性がある地上の法廷と同じように考える

危険な考えを持っているのです。

また彼らは罪の本質と具体的な罪を取り扱う天の法廷の裁判の厳しさを甘く見えています。天の法廷において人の罪はどのようなものであっても見逃されることはありません。また神の裁判は私たちの目に見える罪だけを取り上げるのではなく、人びとの目に隠されている罪も、また本人自身がよく知らない罪までも、見逃されることはありません。

天の法廷で神の公正な義を満足させることができる人間は今まではもちろんのこと未来にもいないでしょう。聖なる天の裁判官の前ではどのような弁明も、言い訳も通用しないのです（ヨブ 9:2、3）。ですから詩編記者はこのようにうたっています。「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら／主よ、誰が耐ええましょう」（詩 130:3）。「あなたの僕を裁きにかけてください。御前に正しいと認められる者は／命あるものの中にはいません」（詩 143:2）。

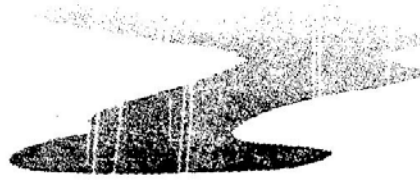
しかしながらある人びとは律法をすべて守れば義人となることができるのではなかと主張しています。しかし、この世には律法をすべて守ることが出来る人は一人もいません。ですからこの地上では律法の呪いから免れる人は誰もいないのです（ガラテヤ 3:10、申命 27:26）。いえ、もし誰かが律法をすべて守ることができたとしても、その程度では天の法廷には通用しないのです。ヨブは律法について自分の良心にどのような負い目も感じていませんでしたが、天の天使たちも天の秤にかけられるなら聖とは認められないと言う事実を語っています（ヨブ 4:17-20、15:15、16）。天の法廷が求める義はヨブが考えていた律法の義を遙かに超えたものだったのです。私たちの中でヨブのように律法をよく守ることが出来る人はいるでしょうか。

また私たちはよく自分を他の人と比較することで優越感に浸ろうとします。「私の方が少しはましだ」と考えるのです。しかしそのような義は神の法廷で取り上げられる価値もないのです。私たちの目は身の回りの事柄だけを見るときには視力に自信をもつことができます。しかし、その目をあげて太陽を見るとき、私たちの視力は、強力な光線のために麻痺してしまうでしょう。この世では人びとの前で誇ってみせている私たち自身の義というものはみなそのようなものなのです。他の人と比較するときは自分の義のために優越感に浸ることができますが、神の義を考えた瞬間、私たちはすぐにそのような確信を失ってしまうでしょう。私たちが人びとの前で私たちの義を誇る時、神は天で私たちの義を憎まれるのです（ルカ 16:15）。人の行為は決して神の義を満足させることはできません（コリント一 4:4）。

第二節 アウグスチヌスとベルナルドゥスの証言

アウグスチヌスが私たちにただ一つの希望について次のような言葉を残しています。「己が朽ちゆく肉の重荷のもとに、またこの人生の弱さの内にあって呻いている敬虔なすべてのものたちは、ひとつの希望を持っている。すなわち、われわれはひとりの仲保者、義なるキリストを持っているということ、そして、かれこそわれわれの罪のためにあがないとなりたもうたということです」（テモテー 2:5、6 参照）。

これが私たちのただ一つの希望であるならば、行為に対する確信はどこにあるのでしょうか。アウグスチヌスはこの希望の他の希望を残していません。またベルナルドゥスはこのように言います。「実際、救い主の御傷のほかに、弱いものたちのための、安全で・堅固な平安と落ち着きはどこにあるだろうか。人はそこに確乎として固執すればするほど、いよいよ確かに救われるので



ある。この世はどよめき、肉体はわれらを押しつぶし、悪魔は待ち伏せをする。だが、わたしは固い岩の上に基礎を置いているからである。わたしの良心は掻き乱される。けれども、わたしは混乱させられない、主の御傷を心に思い浮かべるからである。

また他の箇所では「全人類を救ったもうお方にいっさいの希望をおくならば、それが人間の功績である」と語っています。「教会はどうして功績について思いわずらうのか。すなわち、教会は神の計画のうちに、誇るべき最も確実・安全な理由を確保しているからである。われわれはどういう功績によって恵みを望むかをたずねるに及ばない。功績に関しては、功績では足りないと言うことだけを知りさえすれば足りるのである。だが、功績についてはこれを自負しなければ十分なのであるが、また功績を欠くならば審判を受けるに十分なのである」

ベルナルドゥスがこのように善行について功績と言う言葉を使ったのは偽善者たちの胸に恐怖心を起こさせたためのものだったのです。彼はこのように付け加えています。

「自負なしの功績を欠くことも、功績なしの自負を欠くことのない教会は幸いである。教会によって自負するものを持つが、しかし、功績は持たない。教会は功績を持つが、それは自負するためのものではなく、功績を得るためである。自負しないこと自体、功績ではないのか。したがって、教会は自負をもたないだけ、いよいよ自負することができる。なぜなら、神の大いなる憐れみのうちに誇るべき大いなる材料があるからである」。

第三節 神の前での正しい良心と厳格な自己批判は自分の善行についての一切の主張を捨てさせ、神の慈しみを歓迎して受け入れるように至らせる。

人はあまりにも簡単に自分を賛美して、自己満足に陥り、傲慢の虜になります。ベルナルドゥスはそのような者たちを傲慢で、不忠実な奴隷のようであると譬えながら、このように語ります。

「彼らは彼らを通り抜ける恩寵の賛美を不当にも自分のもとに取り押さえる。これはちょうど壁が窓をとおして光線を受けているのに、自らがこの光を放つと同じようなものである」。

神の前に立つ人間は誰も自分を誇ることはできません。夜空に輝く星たちも太陽の前ではその光を失うように、人間の中ではまれにしかみられないほどのすばらしさも、神の聖さの前ではその光は失うことになるのです。

神の法廷では私たちの心の最も深いところに隠されているものまでみな明らかにされるのです。

「主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます」(コリントー 4:5)。この世で怠惰をむさぼった私たちの良心は神の法廷の前では、すでに自分が忘れていたことまでもすべて白日のもとにさらされることになるのです。しかも私たちを告訴する悪魔は今まで私たちにしてきたすべての罪を知っているので私たちを指さしてその点を攻撃してくるのです。

私たちが今、頼りにし、誇っている、目に見える善行もその場所では何の役にも立たなくなってしまう。神の法廷で私たちに要求されるものは、嘘偽りがない根本的な聖さだからです。ですから今、自分が酔いしれて誇っている偽善はその日、辱めを受けることになります。神の前では罪意識を感じても、人々の前では自分の行った善行を誇ると言う偽善だけではありません、神の前で自分を騙し、自分に媚びる偽善も同じような運命をたどるほかになにのです。このような結末を想像できない人はしばらくの間は自己陶醉に陥って、おろかにも自分の義を誇ることができますが、それはやがて神の審判で消え去ることになります。それは夢でたくさんの財産を得たとしても、夢が覚めればすべてなくなってしまうのと同じようなことです。

ですから誰でも真剣に神様の法廷で要求される義を黙想し、研究する人は私たちのすべての行為がゴミのような汚物にすぎないことを必ず悟るようにされるのです。そして人々がふつう義と認めているものが神の前では全くの「不義」でしかなく、真実だと見えるものが完全に腐敗しており、栄光だと賛美されているものが全く恥辱にすぎないことを知らされるようになるのです(箴言 16:2、21:2、ヨブ 9:20)。

人は自らがかぶっている義の仮面で自らをだまし、それに酔いしれていますが、主は私たちの心の内にある汚れたものすべてを明らかにされるのです(ヨブ 25:4、6)。私たちが神の前で義を誇ろうとすることは、汚れの中から清さを取り出そうとするようなものです(ヨブ 14:4)。ですから人が自分自身を正しく検討しようとするならば、必ず神の法廷に自分を立たせるべきなのです。そして自分に対する一切の賞賛を放棄しなければなりません。そうでなければ、私たちは傲慢の酒に酔いしれて自らをだまし続けることになるからです(ペトロ 5:5、ヤコブ 4:6、箴言 3:34)。

しかしながら、ある人々は神の前で私たちが謙遜であるべきということと、また私たちの義にある程度の価値が認められなければならないと言う二つの考えを同時に語ろうとします。これは非常に危険で、破滅的な偽善だと言えます。自分には何一つよきものはないと徹底して認めるまでは謙遜ではないのです。そのために私たちは私たちが誇ろうとしたり、過大評価しようとする一切のふるまいを明らかに捨てなければなりません。

謙遜は自分が持っている救いようのない貧しさと悲惨を知って、苦しむようになることです。自分を誇ろうとする者たちは自分の繁栄を喜び、それを幸せとします。しかし、そのような者たちは神から捨てられるのです。そして神が救われようと定められた謙遜な者たちには誇りに替わって神に対する希望だけを与えられるのです(ゼファニヤ 3:11、イザヤ 66:2)。さらに謙遜な者たちは自分が罪人であるという痛みがなんであるかを知っている人たちです。罪人という言葉聞くたびに心に痛みを感じ、地にひれ伏したまま起きあがれない人々です(イザヤ 57:15)。

第4節 キリストは義人を招くのではなく、罪人を招かれます。

収税人は自分の胸を打ちたたいて自分が罪人であることを告白しました。しかし、ファリサイ派の人は自分の義を上げ連ねて神に感謝したのです。収税人は自分が罪人であることを認めたために義と認められましたが、ファリサイ派の人は自分が義であると信じたために、神様に正しくないとされました（ルカ 18:13, 14）。キリストがこの世に来てくださった目的は自分の罪の重荷を痛感する人びとを招くためです（マタイ 11:28、9:13、イザヤ 61:1～3）。ですから私たちがキリストの招きに耳を傾けようとするならば、私たちのすべての傲慢と自己満足を捨て去るべきだと言えます。

しかしながら私たちは自分の行為について自信があるときには傲慢になりますが、それほど自信がなくても自分に満足することができます。ですから罪に満ちた生涯の楽しみに酔いしれて、自分に神が施される慈しみと恵みを受けようと熱心に求めることをしないのです。このような放縦と怠惰も私たちが主に近づく道をふさいでいるのです。ですから私たちは天国の法廷ではすべての人間が罪人であるという事実を認めなければなりません。そしてただキリストの義を受けるならば神の審判を避けることができるということを信じる必要があるのです。

結びの言葉

イエス・キリストは天国の法廷での偉大な弁護士です。私には罪の他に誇るものは何もないと言う事実を知り、その罪を悲しみ、ただキリストに自分の弁護を依頼する者たちだけが天の法廷で無罪を勝ち取ることができるのです。